
夕暮れ境界

大泉月詠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕暮れ境界

【Zコード】

Z2206BA

【作者名】

大泉月詠

【あらすじ】

夕日が見せた主人公のコメです

序曲 逢魔時

あなたはあなた?
わたしがそう問うてみる あなたは無言で首を振り 再び問うよ
あなたは誰?

誰かは答えず黙つたまま 西の方にある寺を指す
九つの鐘が町に響いた
あたしはふとむこうにみえる夕日をみつめ なみだひとつながらして
ださいごの問いを投げかける
あなたは向こう側にいつてしまつたの そしてあなたではないあなた
が向こう側からやつてきたのね
真つ赤な夕日が私を照らす

だれかはそつと頷いて そして笑つた
そのとおり そして君も向こう側につれていく
なぜなら わたしがのぞんでいないから
日が落ちていく逢魔時 だれがだれかわからなくなるたましいすら
も失つて

あやふやな ああ あやふやな

第一幕 黄昏境界

序 踏切

最期の夕焼け空はいつものように美しかつた。

閉ざされた踏切の向こうに三歩踏み出した。きっとは、既に僕の辞書から消去され、「もはや」が白紙の部分まで埋め尽くす。

もはや、僕には生きる意味など残つていない。

一人でいるのがつらかった。何をしても報われず、到底たどり着けない高見を横目にちらつかされる。

たとえば、長く胸の内に秘めていた恋心を打ち明けたのに、嘲笑われて。それでお終いとしたら。

その後も、新しい一日を始める」とさえ許されないとしたが。

もはや、苦痛しかない人生に。もはや、幸せなど見出すことなどできるはずがない。

ああ、一度でいいからあの子と××したかった。

ああ、一度でいいから夢をこの手に掴みたかった。

もはや、その思いすらも頭から消えてしまつ。

目の前に、銀色の車体を朱色に染めた帰りの電車が目前に迫つているのだから！

轢かれる光景が白昼夢のように広がる。一、二、三で現実なる夢なのだ。

渴望する生をやつと見つけた。わずかな、刹那と表現するに等しい時間をこの手に収め、一心に願う。

もはや、という字で埋め尽くされた辞書を捨て去り、「絶対」という言葉が必ず頭につく文章で埋められた日記帳がこの手にあれば。絶対、彼女と付き合つという未来が約束されていた。

遠くに向かつて右手を伸ばしてみる。

しかし、伸ばした手が触れたのは銀色の車体。得体の知れぬ痛みが指先より伝わり、また足先からも鈍い衝撃がやつてくる。

指は蛇腹に曲がつていき、つま先はガムのよつに車輪に噛み潰されていく。ああ、そんな風に体が壊されていく様子を描写している間に、どんどん死へと近づいてく。
もつ、痛みを理解することも考へることも許されない。
このまま死んでしまつことなんて

「絶対だ」

僕でない、誰かがそう言った。

走馬灯とやらだろうか。踏切の向こう側、しかし電車のないこの場所は痛みだけでなく意識すらも失つたところなのだろうか。

風もないでいて、踏切のメロディの代わりに「ババ」の羽音のよつ
な、無数の呴きのよくな音が聞こえる。

「すべてがあやふやな。そう、あやふやな。たあ、差し出せ。その
伸ばした手を私が噛んで小さく切って、この畠袋に収めてやひつ」
はつきりとしたひとつの声。

僕は無意識に朱く落ちた太陽に手を伸ばしていた。

「痛てえ」

僕の両腕は砂利のうえにあり、少しの赤い液体をまいていた。言
い方がおかしいけれど、たったそれだけのこと。なぜなら、電車に
轢かれたのだから。

おかしそぎる。

まず、田の前を電車が通り過ぎて行ったこと。

そして、何より息を荒げ

「危なかつたよ。いくら、まつとじているからつて踏切で立ち止
まるなんて」

とこう、女の子が僕の傍らにいたことだ。

続けて彼女は僕をまっすぐに見つめこいつこいつ。

「大好きな人が死んでしまったら、なんて考えただけで最悪ね」

信じられない。彼女は僕をこの民族が作り上げた中で最も鋭利な
言葉で切り裂いたはずなのに。

手の平をうらがえしたようとはまさにこのこと。

だが、田の前に宝が落ちていたら拾わない人などこの世にいない
筈だ。

「ねえ、文化祭一緒に回ろうよ」

甘えた声でそう言った。あの子は包帯でグルグル巻きにされた腕に柔らかなそれを押し付ける。

この状況は、きっと踏切の向こう側に行く前まで一厘の希望すらも見出さなかつたものだ。夢想という度合いでは図れなかつたことなのに、今となつては当たり前のことなのだ。

「もちろん。それに君以外に誰がいる」

「嬉しい」

そういうつて彼女は僕の胸に甘い香りの漂う頭をもたせ掛ける。

あの日に似た夕暮れ、放課後の教室。
似ても似つかぬ、現実がそこにあつた。

「え？ どうして。君が僕のことなんか助けてくれるの？ 今までどうでもいいような関係だつたじゃないか」

僕は痛む両手を灰色に薄汚れた制服で覆い血を止めようと努力する。すると、彼女は着ていた白いブラウスの袖を千切り、僕の両腕に泣きながら巻きつける。

「だつて、死んじやつたらこれからがもうないんだよ。でも、ごめんね。うまく助けられなくて」

涙の塩辛い成分が傷に染みるけれど、悪い気はしない。彼女が僕のために泣いてくれているのだから。

「あの、えと。告白、嬉しかったよ。あのときはびっくりしていくちゃんと答えられなかつたの。ま、まさか、魂飛んじゃうほど私にゾッコンだつたなんて。私も夢見心地だよ」

震える声でも、必死に言葉を紡ぐ。不思議な衝動に駆られて、少し前まではきつと使わることがなかつただひつ、心のある部分が、僕に彼女を抱きしめろと命令する。

だが、腕は痛いのと不格好ながら切なさを感じる白い包帯がほどけてしまうのを恐れて、動かすのをやめた。代わりに口を動かす。

「先だけになってしまったことつた。わ、神様と契約してから言つた。

「ありがと。これから、よろしくお願ひします」

「うちら」

淡い笑い声が重なる。

それは、境界を知らせる踏切の音よりも小さなものだけれども、どんな言葉よりも確かであった。

「どうしたの？」

「いや、あの時のことを思い出しちゃね」

「よくほりつとしてるよね、君は」

「考え事することが多いんだよ」

僕がそうこうと彼女は、柔らかな輪郭にその白く細い指を添えてしばし考え」とをする。

「じゃあ、待つて。君がまつすべしか見えなくなるよにしてあげるから。それにちゃんと答えて、ね」

その後、彼女は笑うだけで言葉の真意を語る」とは時が訪れるまで、なかつた。

鍵当番で入ってきた風紀委員に一喝を受け、帰路につく。他愛もないことを話してくるだけなのに、どれもが輝きを放っていて、手放したくなるものばかり。

夜が

転 降りてくる

文化祭当日は実に多様な物語が繰り広げられていた。体育館にはきっとよき思い出を作るために、一晩に「じん」「おもこ」をはじめ歌う音楽部がいる。

幕の向こうにはプログラムによるダンス部がいるらしい。いつたいどんな世界を見せてくれるのか。

以前は、ただ現象のようにならえていたものが、自他問わず全てに意味があるようになってしまった。それも、傍らで顔を綻ばせる彼女のおかげだ。

この世界は彼女が助けてくれなければ、見る」とさえ叶わなかつたのだ。一つ一つ楽しみ、彼女と共有し、あわよくば何気ない現象の一つにさえ飾りをつけ、喜びを増してあげたいのだ。

「すごい、きれいだったな」

「うん、とっても楽しそうだった」

「ありがとな」

「え？」

「その、お前が助けてくれなきゃ一緒にいつやつて見る」ともできなかつたんだから」

そう告げた途端に、今まで開いていた笑顔の花が閉じた。失敗した、そう思つた途端に考えは止まる。

僕は彼女を楽しませたくて、いつやつて言葉を選んでは彩を添えよつとしてる。唯一の感謝なんだ。

僕は彼女に恋をしたのは紛れもない事実で、今ではいい方の度合いを高めてしまえば崇拜すらしている。

僕は彼女を傷つけるために、ここにいるのではない。この世界と共に過ごし、楽しいとかそういう感情で素敵にしたいと思っている。

「……前にいったよね。考えることを忘れさせてあげるつて」

彼女は俯いたまま、ゆっくりと言つ。垂れた前髪が、薄く閉じた眼差しが、失敗を確かなものであるといつことを教えてくれる。

「あ、うん」

こういう時はなんていえばいい。いや、考えてはいけないんだ。

それを彼女が望んでいたじゃないか。

ああ、それが失敗の理由。

僕は彼女の右腕を掴むと入ごみをかき分けて、一心不乱に屋上を目指していた。

勢いよく鉄扉を蹴り開ける。鉄格子の向こう側には変わり映えのないビルが並び、群青色と朱色が混ざり合っていた。

僕は彼女の肩を掴み噛みつくように、心からの言葉を叫ぶ。

「僕は君を傷つけたくない。むしろ、僕といでよかつたって死ぬまで思つて欲しいと願つている」

さつきまである種の恐ろしさを抱いていた彼女は、もはやその名残すらもなく気圧されて、僕の眼を見ずに短くこたえる。

「うん、知っている

「勿論前回いたる。じつはうそ撒くのもやむを得ない」

もりなんだ」

れぢる。

たけど、それは敢えて押し殺した。

今求めているのはそんなものじゃない

「ああ、でもそんなことは気にならない。だって、僕は君といるだけが幸せなんだから、その時に思ったことを言って、あるままに君と過ごしたい。君が何を思つとも僕は勝手に君が好きで仕方ないんだ」

僕の眼差しの向こうで彼女はすすり泣いていた。
ひどいことを言つてしまつたと後悔。後悔の事実は醜く崩れた僕の
顔と涙が彼女に伝えているだろう。

彼女はしばらくの間そのままでいた。その時間は、日がビル一階分おちるのにも満たないものだったけれど、盛大に気持ちをぶちまけた後の僕にとって、何もできない時間は幾年にも感じられた。

彼女は短くそう告げると、自分の涙を拭いたハンカチで僕の涙も拭き取る。

「そろそろだね」

あの時、僕の手を覆つた何かと同じ声が聞こえたような気がした。
結 ウソじやあないよ

「あーあ、びっくりした。急に私の腕をつかむからさ。襲つてくる
んじやないかと思つたよ」

はーー、と長い溜息をつく彼女。それを見て、自然と笑いが込み上
げてきた。

「アハハ、よかつた。安心したよ。引かれるんじやないかと、心配
していたんだ」

「私もあなたのことが好きだし」

「……」

何も言えなかつた。すると、彼女は意地悪そうに笑つてたたみかけ
るよひに、「

「いっぱい思い出をつくるだけで、樂しいつて思うよひになつてほ
しかつたの。私がいるだけで、それでいいつてほしかつたの
に、あんなふうに言ってくれたら、涙なんか普通に出るよ」

彼女は僕の耳元でゆづくつと囁く。

「ありがとうね」

そして、そつと僕の唇に唇を重ねた。

一瞬の出来事は起こるべくして起こつたのだ。胸の高鳴りは隠せ
ないけれど、彼女の肩から手を放すよひなことをせず、より深く抱
きしめる。

「や、優しくしてください」

日が落ちていく。空は既に群青色に染まつていた。

× × × × × × ×。

× × × × × × × × ×。

× × ?

「君の世界は終わったよ」

彼女は閉じていた目を大きく広げて、深い朱色を湛えていたのだ。
彼女を抱きしめていたはずの両腕が痛み始める。

「どういうこと？」

「黄昏の境界の向こう側に君はもう取り込まれてしまつたの」
抑揚のない声で彼女は言う。

「いいものを手に入れさせてくれた。ありがとう」

その瞬間、彼女に触れていたはずの右手があの時のよつて、過ぎ
去つた「あの時」のように、

銀色の車体に向かつて伸ばされていた……一

「ウソだろ」

「うそじやないよ」

あの時の声が頭に響いては、もはや抑えることができない恐怖が波
紋する。

「すべてがあやふや。君の望んだ世界と現実ともあやふやなんだ。
そう、なぜならここはすべての『境界線』なのだから」

カーン、カーンカーン。

それから間もなくして、確実に轢かれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2206ba/>

夕暮れ境界

2012年1月5日17時52分発行